

厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）  
分担研究報告書

「現場や地域の実情に即したがん治療と並行する緩和ケア」の実装戦略の開発

研究分担者 島津 太一 国立研究開発法人 国立がん研究センター・室長  
研究協力者 采野 優 京都大学大学院 医学研究科 腫瘍薬物治療学講座  
西村 真由美 京都大学大学院 医学研究科 健康情報学分野  
宮崎 貴久子 京都大学大学院 医学研究科 健康情報学分野  
中山 健夫 京都大学大学院 医学研究科 健康情報学分野

### 研究要旨

本研究の目的は、研究班全体の目的の一つである「①『現場や地域の実情に即したがん治療と並行する緩和ケア』モデルの実装に係わる方策・実装戦略の開発」に向けて、『現場や地域の実情に即したがん治療と並行する緩和ケア』モデルとして有望なモデルを明らかにすることである。

前年度に行った調査により、がん患者の生活の質を向上させるケア提供（ケアデリバリー）方法として、新たな革新的な技術を用い、①患者自身の問題解決能力を高め、②患者の苦痛・苦悩を適切にモニタリングし、医療者の負担の軽減と、患者の適切な行動変容の推進、難治性・緊急性のある苦痛・苦悩に対して医療資源を集中するケア提供体制の構築が望ましいと考えた。すなわち、医療資源の不足を補う方策として研究班として上記の①、②の開発および実装の課題を明らかにし、新たなケアデリバリーモデルを研究班として提案する方針とした。

本分担研究では、②患者の苦痛・苦悩を適切にモニタリングとして、昨今のヘルスケアIT分野の潮流やPRO（患者報告アウトカム）の重要性が強調されていることを踏まえ、ePROによる症状モニタリング・スクリーニング手法を開発・実装し、その実装に係る課題、特にその持続可能性に係る課題を質的に明らかにすることとした。よって、本研究の目的は、ePROシステム実装における、その持続可能性に係る課題を明らかにすることである。今年度は、ePROシステム実装の持続可能性に係る課題を同定する手法を、先行研究をもとに計画・立案した。

また、前研究班の調査や他の先行研究でも、地域連携や医療者教育が質の高い緩和ケアの提供を継続する上で重要であることが示されてきたが、その実態や課題、望まれる方策についての調査が不足しており、同調査も計画・遂行中である。

#### A. 研究目的

前年度に行った、がん患者の生活の質を向上させるケア提供（ケアデリバリー）方法で、科学的に効果が実証されている介入方法に係る調査をもとに、新たな革新的な技術を用い、①

患者自身の問題解決能力を高め、②患者の苦痛・苦悩を適切にモニタリングし、医療者の負担の軽減と、患者の適切な行動変容の推進、難治性・緊急性のある苦痛・苦悩に対して医療資源を集中するケア提供体制が望ましいと考え

た。すなわち、医療資源の不足を補う方策として研究班として上記の①、②の開発および実装の課題を明らかにし、新たなケアデリバリーモデルを研究班として提案する方針とした。

本分担研究では、②患者の苦痛・苦悩を適切にモニタリングとして、昨今のヘルスケアIT分野の潮流やPRO（患者報告アウトカム）の重要性が強調されていることを踏まえ、ePROによる症状モニタリング・スクリーニング手法を開発・実装し、その実装に係る課題、特にその持続可能性に係る課題を質的に明らかにすることとした。よって、本研究の目的は、ePROシステム実装における、その持続可能性に係る課題を明らかにすることである。

## B. 研究方法

ePROシステムの概要は、他研究分担者（中島貴子）報告書を参照とし、ここでは持続可能性に係る課題の同定方法を記載する。

質的調査の基本的な考え方として「ePROが現場で根付き、定着し、使い続けられるためには何が必要か？」を研究の主たる関心とし、定量的データと合わせて、持続可能なePROシステムの実装戦略の構築に寄与しえるデータを収集する。実装アウトカムにおける持続可能性を評価できる尺度の報告は少なく、日本語で妥当性・信頼性が確認された尺度は2022年1月現在、存在しない。その中で、A measurement instrument for sustainability of work practices in long-term care-long versionのRoutinizationの項目やNormalisation Measure Development Questionnaire (NoMAD)が、研究班の関心に近い尺度と考えられた。NoMADはNormalization Process Theory (NPT) をより実践的に拡張するための尺度として開発され、Coherence（首尾一貫性）(What is the work?)、Cognitive Participation（認知的参加）(Who does the work?)、Collective Action（集団的行動）(How do people work together to get the work done?)、Reflexive Monitoring（省察

的モニタリング）(How are the effects of the work understood?)の4つの領域で構成される行動理論であり、態度や信念ではなく、人々の行動に焦点を置く。AngelaらはePROのケーススタディのレビューにおいてNPTの活用についても言及し、ePROの実装戦略を検討する上でのNPTの有用性について提案している (Angela M, 2021)。また、Kimberlyらの実践報告においてもNPTは言及され、ePRO実装における普遍性のある推奨を開発する上で、NPTは鍵となる理論の一つとしている (Kimberly M, 2021)。よって、NPTは、ePROシステムの持続可能性に係る課題を同定するに適当な理論と考えた。

以上から、NPTに基づき、Coherence, Cognitive Participation, Collective Action, Reflexive Monitoringで構成されたインタビューガイドを作成し、これに基づいて、ePROシステムの実装に関わった医療従事者を中心に、半構造化面接を実施する。

### （倫理面への配慮）

本研究は、「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」（令和3年文部科学省・厚生労働省・経済産業省告示第1号）に則り、研究計画を策定し、「京都大学大学院医学研究科・医学部及び医学部附属病院医の倫理委員会」で審査を受け、承認を得たうえで、遂行中である。

## C. 研究結果

本年6月まで研究参加者を募集し、8月末まで追跡予定である。

## D. 考察

すべての研究参加者の追跡が終了後に、順次ePROシステムの実装に関わった医療従事者を中心に、半構造化面接を実施する予定である。

## E. 結論

本研究を通して、ePROによる症状モニタリング・スクリーニング手法の持続可能性に係る課題および、その実装戦略が明らかになることが期待される。

F. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

G. 知的財産の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし